儒教の異端論

――特に孟子の墨家排撃について――

市川本太郎
（信州大学教授　教育学部）

一、序言

今日の世界は殆んど二分せられ、ソ連的共産主義とアメリカ的民主主義とが対立し、相互に異端視している状態である。何れの時代に於ても思想的対立と、其の勢力的争闘とは免れない所であつて、これが全く一となることは期待し得られない所である。時間的・空間的に、又生物学的に異る人類は、其の思想も各々の顔面が異るが如くに相違するのが当然である。この相違のある所に思想は次第に進化し、弁証法的に止揚せられることによつて、思想的進展を期待することができるのである。若しこれが統一されるならば、恐らく文化の進展は沈滞停留して、寧ろ人類を破滅に導くであろう。此の意味から思想の対立は避くべきものではなく、却つて希望すべきものであつて、人類発展の為に緊要なものであるといわねばならぬ。そこで異つた対立する思想が存在する限り、他を異端として排斥攻撃することも亦人情として已むを得ないことである。併し、これが又一面に於てはその切磋琢磨によつて文化が向上する点から見れば、寧ろ歓迎すべきものである。（されど人類の幸福を害する闘争は排斥すべきである。）中国の春秋戰国の時代は諸子百家が輩出し、各自が自説を主張し他を排撃し、その論争は実に活潑であつた。殊に儒家と他の諸家との間には論争甚だしく、文献的にもその資料は多く残存している。かゝる論争に依つて他家は勿論、儒家の思想も進展し、最初実践を主とした儒家の思想も、次第に思惟的・哲学的思想にまで進展するに至つたのである。そこで儒家には他家を排撃した異端論が存し、他家には儒家に対する非儒論が存する。此の小論文に於ては非儒論については後日にゆづり、先づ前者の儒教の異端論、特に孟子の墨家思想排撃の目標と理由とを明かにしたい。

二、儒家の異端論概説

中国に於ける春秋より戰国にかけての時代は、周の王権次第に衰え、諸侯は放恣にして富国强兵を競い、王命に服する者は殆んどなかつた。学者も亦思想の統制が弛み、造言乱民の刑も有名無実となり、言論が自由となつた結果、私見臆説を逞うし所謂諸子百家の輩出を見るに至つた。そこで孔子は「攻(おさむる)二異端一斯害也已。」(論語為政篇)と述べて異端の説が学問修養に害あることを警告したのである。これが儒教における異端論の第一声である。然らばこゝに孔子の所謂「異端」とは何か。朱子は注して

異端非二聖人之道一、而別為二一端一、如二楊墨一是也。其率二天下一、至二於無父無君一、專治而欲レ精レ之、為レ害甚矣。(集註論語)

と述べている。この文によれば儒教の異端と称するものは聖人の道にあらざるもの、即ち儒教以外の説を総称して異端と呼んだことゝなる。恐らく孔子も亦此の意味と同様な意義に於て用いたものであろう。孔子は円満な人格をそなえた聖人であるが故に、過激な言を以て他説を排することなく唯一言この言があるのみである。

然るに孟子に至つては、異端の害ある事を深く感じ、概然として起ち異端攻撃の鋒を鋭く振つている。これは孟子の時代・孟子の性格等にもよることであるが、孟子の目的とする所が王道国家を建設し、仁義の大道を実現し、以て天下を泰平ならしめるにあつたのであるから、目的達成の為には当時隆盛を極め氷炭相容れぬ他の諸家に対しては、排撃せざるを得なかつたであろう。殊に孟子の時代に於ては、覇道が盛に行われ、しかも其の美点が失われ、諸侯は唯弱肉强食・攻伐争闘に寧日なく、人民は塗炭の苦難に陥り、其の害実に恐るべきものがあつた。故に孟子は先づ覇道(註一)及びその鼓吹者たる合從派の排斥をなさゞるを得なかつたのである。又思想界は諸子百家によつて各種の説が横行し、人民は帰趨を失い邪説に迷わされる者も多かつた。そこで孟子は自説に反する思想に対しては、痛烈なる排撃を行つたのであるが、その対象となつたのは、第一には楊・墨の二家であり、第二には神農(註二)の言を奉ずると称する許行の徒であつたのである。尚孟子には告子・宋牼・公孫衍等の言行に対しても亦反対しているが、これには過激な言は弄していない。

次に荀子に於ても異端の攻撃がある。彼の有名な非十二子篇には它囂・魏牟・陳仲・史鰌・墨翟・宋鈃・慎到・田駢・惠施・鄧析・子思・孟軻の六派十二子を非難攻撃している。此の十二子は学派の不明なものもあるが、其の明かなものとしては、墨・宋の墨家、慎・田の法家、惠・鄧の名家、子・孟の儒家の四派八子である。荀子が儒家でありながら子思(註三)・孟子の儒家を非難したことは、彼の性悪論と共に後世宋儒によつて、彼が排斥せられる原因ともなつている。荀子に於ては非十二子篇のみならず他の篇に於ても、諸家に対する

非難の言が散見せられる。

（註）一、管仲以二其君一霸、晏子以二其君一顯。管仲晏子猶不レ足レ為與。孟子曰以レ齊王、由レ反レ手也。（孟子、公孫丑篇上）

五霸三王之罪人也。今之諸侯五霸之罪人也。（孟子、滕文公篇下）

二、夫物之不レ齊、物之情也。或相倍蓰、或相什伯。子比而同レ之、是亂二天下一也。巨屨小屨同レ賈、人豈為レ之哉。從二許子之道一、相率而為レ僞者也、惡能治二国家一。（孟子、滕文公篇下）

三、略レ法二先王一、而不レ知二其統一、猶然而材劇志大、聞見雜博、案二往旧一造レ說、謂二之五行一、甚僻違而無レ類、幽隱而無レ說、閉約而無レ解。案飾二其辭一、而祇敬之曰、此真先君子之言也。子思唱レ之、孟軻和レ之。世俗之溝猶瞀儒、嚚々然不レ知二其所レ非也。遂受而伝レ之、以為二仲尼子游為レ茲厚二於後世一。是則子思孟軻之罪也。（荀子、非十二子篇）

三、孟子の墨家排撃の目標

孟子の排撃を加えた最も著しい対象は、楊朱派と墨家とである。其の言に曰く：

処士横議、楊朱墨翟之言盈二天下一。天下之言不レ帰レ楊、則帰レ墨。楊氏為レ我、是無レ君也。墨子兼愛、是無レ父也、無レ父無レ君、是禽獸也。公明儀曰、庖有二肥肉一、廐有二肥馬一、民有二飢色一、野有二餓莩一。此率レ獸而食レ人也。楊墨之道不レ息、孔子之道不レ著。是邪說誣レ民、充二塞仁義一也。仁義充塞、則率レ獸食レ人、人将二相食一。（孟子、滕文公篇下）

と。楊朱の為我主義、墨翟の兼愛說が孟子の排撃する目標であることは、此の文によつて明かである。墨子の兼愛說に対しては、父を無みするものと評し、その為に仁義が充塞せられ、邪說に誣せられるとし、更に禽獸之道であると酷評し、其の攻撃の目標を明かにしている。尚他の篇においても兼愛說を次の如く評している。

墨子兼愛、摩レ頂放レ踵、利二天下一為レ之。（孟子、盡心篇上）

墨子の兼愛（註一）は一面より観察すれば徹底した平等愛とも云うべきものである。儒教に於ても愛は說く所であるが、兼愛說の如き無差別平等の愛ではなく、本末軽重を明かにし遠近親疎による差別的博愛である。（註二）我が老を老として人の老に及び、我幼を幼として人の幼に及ぶ方法が、孟子の說く仁義であつて、差別の観念が基礎となつている。然るに兼愛の思想から云えば、自己の父老を愛すると同様に他人の父老を愛し、そこに何等の差別を認めざるが故に、これを実践するにおいては孝道を害する虞れがある。そこに孟子が「墨子兼愛是無レ父也。」と攻撃した理由が明かとなるのである。朱子は

墨子愛無差等、而視其至親、無異衆人、故無父。（孟子、滕文公篇上）

と説明し、愛の無差等を以て無父の根拠としているが、孟子の意を得た解釈であろう。

次に孟子が墨家を排撃した目標は、其の節葬説であるが、墨子の節葬説の内容は、薄葬と短喪との二者である。（註三）薄葬においては棺・槨・穴等を簡略にすること、短喪においては儒教の三年喪を長きに失するとして之を短縮することが、節葬説の要点である。かゝる説は当時の厚葬久喪の弊を改めるものであると云うべきであるが、墨家者流の言は人情を顧みず、たゞ実利的方面よりのみ説くので、孟子はこれを非難したのであろう。孟子は墨家の思想を奉ずる夷之に対して

吾聞夷子墨者。墨之治喪也、以薄為其道也。夷子思以易天下、豈以為非是、而不貴也。然而夷子葬其親厚、是以所賤事親也。（孟子、滕文公篇上）

と述べて、薄葬説を主張する夷子が、自己の親に対して却つて厚葬を行つたことを非難すると共に、これが人情の自然であることを暗示している。夷之は之に対して答える言なく他を云つて問題の中心をはづしている。然し孟子は之を逃がすことなく、更に葬儀の基づく人情の源について次の如く示している。

上世嘗有不葬親者、其親死則挙而委之壑、他人過之、狐狸食之、蠅蚋姑嘬之、其顙有泚。睨而不視、夫泚也。非為人泚、中心達於面目、蓋帰反虆梩而掩之。掩之誠是也。則孝子仁人之掩其親、亦必有道矣。（孟子、滕文公篇上）

儒教の礼は単なる形式のみではなく、又利不利の観念に基づくものでもなく、真情を基礎としたものである。故に葬礼に於ても亦真情を盡し、我が親を葬るに子として為し得る限りの手を尽すことは人情の自然であるとするのである。かゝる点より孟子は墨家の節葬説を非難したものであろう。

（註）一、兼相愛交相利之法、将奈何哉。子墨子言、視人之国、若視其国、視人之家、若視其家。是故諸侯相愛、則不野戰。家主相愛、則不相篡、人與人相愛、則不相賊。（墨子、兼愛篇中）

二、老吾老、以及人之老、幼吾幼、以及人之幼、天下可運於掌。（孟子、梁惠王篇上）

三、子墨子制為葬埋之法曰、棺三寸足以朽骨、衣三領足以朽肉、掘地之深、下無泉潤、気無発泄於上、壟足以期其所則止矣。（墨子、節葬篇下）

四、孟子の墨家排撃の理由

孟子の異端論は其の範囲広く、前述の如く霸道をはじめとして、告子・宋牼・公孫衍等に及んでいるが、楊墨に対するものと比較すれば極めて微々たるものである。然るに楊墨に対しては前述の如く單なる排斥ではなく、之を正面より攻撃して挑戦し、鋭鋒を向けている。然らば孟子は何が故にかくも鋭い言を以て墨家に攻撃を加えたのであるか。勿論前節に述べた攻撃の二目標が孟子の思想に反し、目的達成に障害をなした点に存するが、その根柢においては更に深い理由が存するものと考えられる。そこで余は次の数項を挙げて、特に孟子が墨家を排撃した理由となさんとするものである。

一、墨家の学には儒教殊に孟子の学説とは、相容れざる相違の存すること。

二、墨家の学には儒教と似て非なる点が存し、害毒を流すと見たこと。

三、墨家の学は当時天下に風靡し、儒教に反対したこと。

四、墨家の学は孟子の遊説した地方に行われたので、遊説の妨害となつたこと。

この四点について以下細説論証したいと思う。

一、儒墨學説の相違　儒家と墨家との学説の相違については先にその一端についてふれておいたが、全体について見れば次の数項を挙げることができる。

(イ)儒と墨とは其の学の拠る所を異にしている。墨子は中心学説である兼愛説を説くに当り、(註一)兼愛は天の意志であつて、天は天下の人民を無差別平等に兼愛するが故に、人は天意を奉じて無差別に愛することが、道であると説くのである。然るに儒教に於ては人の道は人の性に根拠するものであるとし、特に孟子の仁義礼智の如きは、四端の心に基づき、四端の心は人性に発するとして、説くこと極めて詳細である。(孟子、公孫丑篇上)即ち墨子は道の根源を直接天に置き、儒教はこれを(窮極においては天においているが)直接には人性におき、両者その出発を異にしている。

(ロ)儒と墨とはその理想とする所を異にする。儒教は周の文武周公を重んじ周道(註二)を理想とするに対して、墨家は主として夏を理想としているが如くである。墨家が特に夏禹を理想としたことは既に淮南子(註三)において指摘せられ、又孫詒讓之を認めて之を墨子閒詁に述べている。

(ハ)墨子の兼愛説は儒教の汎愛説、殊に孟子の仁義説とは異る。此の点は前にもふれた所であるから省略するが、たゞ墨子は差別的博愛を別愛と称し、之を非であるとしている点を附加しておく。

(ニ)葬喪について儒墨その主張を異にする。薄葬短喪主義は兼愛・交利・貴儉等の墨家の諸説より直ちに演繹されるべきものであるが、儒家の厚葬久喪説とは相反するものである。

(ホ)音楽に対して儒墨各〻異つた見解を持つ。王公大人が音楽の為に無益な財を費し、且つ貴重な時間を浪費するは、富国の法にあらずとして、墨子は音楽を非とし非楽篇を著している。之に対し儒家(註四)は礼楽を以て、天下を治める要具となし、六芸の一部として之を尊重する。孟子は此の点には一言もふれず、荀子に至つて墨子の非楽を論理的に駁し数項の例証を挙げて其の非を述べている。

(ヘ)宿命説において儒墨見解を異にしている。墨家は宿命説を絶対的に否定し、吉凶禍福一切運命が天に依つて定まるものでないことを信じ、墨子は非命篇を作り、人生には宿命はなく、唯勤惰(註五)と善悪の行為によつてのみ栄辱貧富が定まるものであるとしている。儒家に於ては極端な宿命説を説くのではないが、一種の宿命説を信じ、孟子(註六)の如きは人事を尽して天命を待つと云う程度の宿命説を説いている。

以上の六項は儒墨学説の主なる相違点であるが、かゝる相違が当然相排撃せざるを得なかつた最大の原因であつたことは、肯定せられなければならない。

(註)一、天意曰此之二我所レ愛、兼而愛レ之、我所レ利兼而利レ之、愛レ人者此為レ博焉。利レ之者此為レ厚焉。(墨子、天志篇上)

二、〔子曰〕……吾悅二夏之礼一、杞不レ足レ徵也。吾学二殷之礼一、有二宋存一焉。吾学二周礼一、今用レ之。吾従レ周。(中庸章句、第廿八章)

三、墨子学二儒者之業一、受二孔子之術一、以為其礼煩擾而不レ佞。厚葬靡レ財而貧レ民。服傷レ生而害レ事。故背周道一而用二夏政一。(淮南子、要略部)

四、子曰……礼楽不レ興、則刑罰不レ中。刑罰不レ中、則民無レ所レ措二手足一。(論語、子路篇)

五、強必富、不レ強必貧、強必飽、不レ強必飢、故不二敢怠倦一。(墨子、命篇下、非)

六、莫レ非レ命也。順二受其正一、是故知レ命、不レ立二乎巖牆之下一、尽二其道一而死者正命也。桎梏死者、非二正命一也。(孟子、尽心篇上)

二、儒墨学説の似而非的なもの　前項の如く儒墨の学説には相違があるも、又一面相似たる点があつて、然も非なるものである。

(イ)天を以て学説の標準とすることは儒墨大体似た点である。墨子は天を以て最高の標準とし、天の意志を学説の基礎とし天志篇を作つている。儒家も天を以て人性を賦與するものとし、天を最高の実在と認めている。儒墨何れも中国古代思想に共通する天の存在を信じた事は同様であるが、其の見方に於ては相当の差がある。儒家(註一)が主宰的・哲学的に天を見ているに対し、墨家(註二)は單にこれを功利的に解している。これが墨学が儒学に対して似て非なる点の一である。

(ロ)儒墨何れも鬼神の存在を認めている。墨子は明鬼篇を作り鬼神の種類や性質を明かにして、天鬼・山水の鬼神・人鬼が何れも多大の

力をもつて人類を賞罰するものとしている。儒家においては鬼神を認めても、祭祀することが重要視せられその対象となるのみで、墨家の如く鬼神によつて賞罰の行われることを明言せず、祭祀の本義は報本反始にあるとしている。

(ハ)戰争攻伐を非とする点儒墨共に似ている。墨子は非攻篇を著して攻伐を非とし、戰争は人畜を害し国庫を窮乏にし、人民を悲惨に陥らしむるものであるとし之を排斥している。儒教に於ても戰争を非とし、殊に孟子は平和論者で、非戰論を主張したことは、霸道を排撃した点からも察することができる。然るに其の動機に於ては両者同一ではなく、墨家は主として功利的な立場より説き、孟子は仁義の為、道義の為に説き、其の間の相異は墨家者流の宋牼と孟子との問答はよくこれを示している。(孟子、告子篇下)

(ニ)積極的に天下を救済せんとする立場は儒墨相似た所である。孔子・墨子何れも天下の混乱を救済せんとして各国を游説し、「孔席暖まらず、墨突黔まらず」との語は、よくこの間の消息を示している。然るに墨家は單に物質的に富国交利を目的とし、儒家は精神的に修己治人の下に、王道楽土の建設を理想とし、両者の救済の理想は同一ではない。

(ホ)儒墨共に愛を説く点は共に相似た所である。墨子は兼愛を説き孔子は汎愛を説くが、其の方法の異ること先述の如くである。

以上は墨家の説が儒教の説に似て非なる主なる点について列挙したのであるが、似て非なるものは、外見においては殆んど区別を見出すことは困難であつて、一見同一の如く見える為に惑わされるのである。故に孟子は其の弊害を恐れて、其の点を明かにし、極力之を排撃したのである。

(註)一、天降下民、作之君、作之師。惟曰其助上帝。(孟子、梁惠王篇下)

二、当天意而不可不順。順天意者、兼而相愛、交相利、必得賞。反天意者、別相惡、交相賊、必得罰。(墨子、天志篇上)

三、墨学の隆盛　墨家の学が当時天下を風靡したことは、次の諸点から知られる。

(イ)儒墨の併称　墨家の学は儒教と併称せられて、儒教と並んで当時盛であつたことを知ることが出来る。先づ墨子の学が天下に風靡したことを最初に述べたのは孟子であつて、「楊墨之言盈天下」と称し、或は「逃墨必帰於楊、逃楊必帰於儒」と云い、楊・墨・儒を以て天下を三分せるものゝ如く述べている。儒・墨が当時の顯学であつた事は、諸書に散見する所である。荀子に

人一之於礼儀、則両得之矣。一之於情性、則両喪之矣。故儒者将使人両得之也。墨者将使両喪者也。是儒墨之分也。(荀子、礼論篇)

と述べて、儒・墨を対挙し、更に韓非子は儒・墨を以て顯学であることを、次の如く明言している。

世之顕学儒墨也。儒之所レ至、孔丘也。墨之所レ至、墨翟也。（韓非子顕学篇）

孔・墨の対挙は文献的に多くを挙げることが出来るが、左に呂氏春秋と淮南子の例一二を挙げて他は省略する。

孔墨之徒属彌衆、弟子彌貴、充満天下。（呂氏春秋尊師篇）

孔墨之後学、顕二乎於天下一者衆矣。不可二勝数一。（呂氏春秋当染篇）

孔丘墨翟、無レ地而為レ君、無レ官而為レ長。（淮南子道応訓）

(ロ)墨子の直門　抑々其の学の流行を示すものは、一に其の教学を奉ずる弟子の有無にある。孔子は弟子三千人と称せられ、如実に其の学の隆盛を示している。

子墨子曰、公輸子之意、不レ過レ欲レ殺レ臣、宋莫二能守一、可レ攻也。然臣之弟子禽滑釐等三百人已持二臣守圍之器一、在二宋城上一、而待二楚寇一矣。（墨子公輸篇）

この文によれば、墨子の門弟は宋のみに三百人が活動した事が知られる。かくの如く墨子の弟子は各地に遊説し、姓名の今日に迄伝えられている者でも左の十数名がある。

禽滑釐（史記儒林伝）（墨子備梯篇）（列子楊朱篇）（呂氏春秋当染篇尊師篇）　耕注子（墨子耕注篇）　高石子（墨子耕注篇）　公尚過（墨子魯問篇）　彭軽生子（墨子魯問篇）

曹公子（墨子魯問篇）　勝綽（墨子魯問篇）　程繁（墨子三辯篇）　跂鼻（墨子公孟篇）　高孫子（墨子魯問篇）　弦唐子（墨子貴義篇）　隨巢子（漢書芸文志）　胡非子（漢書芸文志）

(ハ)交友関係　墨子が東奔西走して直接交渉を持つた人物は、相当の数になつていると思われるが、今日其の名の存する主なるものは次の数人である。

魯陽文君（墨子魯問篇耕注篇）　公輸般（墨子公輸篇）（尸子止攻篇）（戰国策宋策）（呂氏春秋愛類篇）　吳慮（墨子魯問篇）　穆賀（墨子貴義篇）　公良桓子（墨子貴義篇）

巫馬子（墨子耕注篇）　告子（墨子公孟篇）　楚惠王（墨子貴義篇）

(ニ)墨子の門流　天下の顕学として墨家の学は墨子の死後に於ても、其の門流が勢力を張り世に風靡したことは、前文直門弟子の活動からも想像せらるゝ所である。韓非子には

自二墨子死一也、有二相里氏之墨一、有二相夫氏之墨一、有二鄧陵氏之墨一。（韓非子顕学篇）

と述べ、周末の韓非時代には相里氏・相夫氏・鄧陵氏の三墨が存した事を示している。荘子にも

相里勤之弟子、五侯之徒、南方之墨者。苦獲己歯鄧陵子之属、俱誦二墨経一、而倍譎不レ同、相二謂別墨一。（荘子天下篇）

と墨子の門流を記している。此の文は古来異説があつて曖昧であるが、韓非の文と参照すれば判明する点がある。相里勤は相里氏の墨であり、鄧陵が鄧陵氏の墨であることは明確である。相里氏は南方の墨者であり、鄧陵氏は苦獲己齒と共に別墨と称せられ、北方の墨であつたであろう。尙呂氏春秋に墨者と見るべきものに孟勝・田襄子・徐弱・腹蘄・謝子・唐姑・田鳩の七子が見られる。孟勝の死に際しては、之に殉死する弟子百八十三人存在した事が上徳篇に見えている。徐弱は孟勝の弟子であり、田襄子と腹蘄とは鉅子となり、後者は義侠の士で、秦の惠王より尊信せられ特殊な待遇を受けた。(呂氏春秋去私篇) 謝子は東方の墨者として、唐姑果は西方の墨者として秦に仕え、東西対峙した。(呂氏春秋去宥篇) 田鳩も亦秦に往き更に楚に仕えて信任せられた。(呂氏春秋首時篇)

以上は墨学の隆盛についてその大略を見たのであるが、儒家にとつては一大敵国の観があつたことは想像に難くない。そこで孟子が儒家の興隆を図り孔子の道を著す為には、当然之を攻撃せざるを得なかつたのである。殊に孟子の性格から見るならば、到底黙視することは許さなかつたであろう。故に孟子は口を極めて「楊墨の言止まざれば孔子の道著れず」と唱えて攻撃したのである。

四、墨学流行の地　墨子の学が何れの地方に多く行われたかを見るには、墨子の生国と、墨子の遊説地とが中心となるものと考え、以下此の二点について考察を進める。

(イ)墨子の生国。唐の楊倞は荀子修身篇の注において、墨翟は宋人であることを明示している。楊倞の説は史記孟荀列伝に「墨翟宋之大夫、善守禦為節用」とあるに拠つたものと考えられる。墨翟が宋の大夫であつたと云う記事は墨子の書には見えないが、一歩を譲つて宋の大夫であつたと認めても、果して宋人であるとは断定できない。又宋の為に楚の攻伐を中止せしめた記事(墨子、公輸般篇)があるとしても、直ちに宋人と確定する根拠とはならない。何となれば彼は非戦論者であるが故に、この事は宋のみに限つたことではなく、魯を攻めんとした斉に対してもとつた方法であるからである。(墨子、魯問篇) これらの考察から墨翟が宋人であると云う確証は得られぬのである。然らば何れの国の人か。呂氏春秋によれば、墨子が楚に行き戦争を中止せしめんとした時、彼は魯から出発しており、又墨子魯問篇には越が墨子を採用せんとした時「迎子墨子於魯」と記している。これ等の記事から推察するに、彼は遊説に出る以外は魯に居つたものと思われる。この点より考察して蓋し墨翟は魯人ならんと考えられる。孫詒讓も魯人と推定して

「案此蓋因墨子為宋大夫、遂以為宋人、以本書攻之、似当以魯人為是。(墨子、伝略)」

と述べている。墨子は魯に生れ一度は儒教を学び、後には一家の学を立て、魯鄒を中心として活動したものであろう。墨子は魯に在つては魯君の問を受け、或は魯を守る為に斉の項子牛に説き弟子の勝綽を斉に遣し、或は魯の南鄙に吳慮を訪問した事もある。又呂

氏春秋に

魯惠公使二宰讓請一郊廟之礼於天子一、桓王使二史角往一、惠公止レ之。其後在二於魯一。墨子学レ焉。（呂氏春秋当染篇）

とあるが、此の文は墨学の源流を知る一資料ともなり、又彼が魯に在つた事を示すと共に、彼を魯人とする傍証ともなる。

(ロ)墨子の遊説地　「墨突黔まらず」と云わるゝ如く、墨翟は各国を遊説したことであろうが、現存の文献によつて知り得る所は斉・宋・衛・楚の数国に過ぎない。墨子と斉との関係においては、戰争中止の為に行き、或は門人勝綽を遣わした事によつて知られる。次に宋については史記に宋大夫とし、漢志もこの説を襲ぎ、鄭樵の通志芸文略・晁公武の郡斎読書志・陳振孫の直斎書録解題等皆史記説を踏襲している。之等の説の如く彼が宋の大夫であつたのかも知れない。兎に角宋とは深い関係があつて、弟子の曹公子を遣わしたり、又禽滑釐等三百人が居つたりしたのである。衛については「子墨子南遊使レ衛」の語が墨子貴義篇に見えているが、衛に行つては、良桓子に自説を主張している。楚については彼との関係は深く、戰の中止の為に赴き、或は楚の献惠王に見えた事もある。以上は墨子が自ら遊説した足跡の大略であるが、その範囲は魯を中心とし斉・宋・衛・楚の範囲で、燕・趙・韓・秦等へは赴いていない。孫詒讓も墨子遊説の地を

蓋生二於於魯一、而仕レ宋其平生足跡所レ及、則嘗北之レ斉、西使レ衛又屢遊レ楚、前至レ郢後客二魯陽一、後欲レ適レ越而未レ果。（墨子閒詁後語墨子伝略）

と述べ、魯斉宋衛楚を認めている。然し之等の国に彼が何時頃行き、如何程の期間滞在したか明確でない。墨翟のこれ等の足跡と孟子の足跡と比較すれば、多少の出入があるが略々魯を中心として其の附近に及んでいることは、ほゞ一致している。厳密に云えば墨子の足跡は孟子より広く、孟子は楚衛に行かず、斉魏を主として滕魯を従としたと見ることができる。

孟子の時代には既に墨子が歿し其の門流が四散して、東西南北諸国に師説を主張し天下に風靡していたものであろう。其の為に孟子が儒道を説くには障害となり、且つ天下が墨学に禍されると孟子は感じたのであろう。又一面孟子も当時の游説の士であるが故に他の游説の士と同様に、自説の採用を望み自己の出世を目的としたであろう。自説が採用される為には他の学説を非難し攻撃して、自説の長所を説くことが必要であつた。こゝにおいて孟子も亦、儒学の振興を図ると云う目的ばかりではなく、自己の出世を図る為にも当時最も勢力のあつた墨学を排撃することは是非必要であつたに相違ない。この点からも排撃の理由が求められるのではあるまいか。

五、孟子の墨家排撃に対する批判

孟子が墨家を排撃した理由は大略前節に於て説いた四項と思われるが、彼は其の理由から楊朱と併せて墨家に対し痛烈な排撃を加えたことは前述の如くである。其の排撃の対象は主として学説の相違であつて、殊に兼愛説と節葬説とは実にその二大目標である。儒墨学説の相違は決して此の両者にとどまるのではないが、孟子は之以外には及んでいない。然らば孟子の此の二説に対する排撃批評が果して当を得たるものであるか、この点を最後に論じて結論としたい。

一、兼愛説に對する排撃の批判。 孟子は兼愛説に対して「墨氏兼愛是無父也」と攻撃しているが、「無父」と称する理由は、朱子が「愛無差等」と説くが如く、無差別的博愛を指すものであることは明かである。更に孟子は「無父」を以て「是禽獸之道也」と酷評している。禽獸之道と称する理由は、無差別的愛である兼愛説は悪平等であつて、我が父も他人の父も同様となすので、孝道を無視したものであると考えたのであろう。即ち我が父を特に我が父として特別に敬愛することを無視したものであるが故に、兼愛説は「無父」であり「禽獸之道」であるとしたのであろう。然るに墨子は決して孝道を無視し、父を無みする意志はなく、却つて父を愛し保護する為に兼愛説を主張したのであろうと思われることが、次の文によつて知られるのである。

兼相愛交相利之法、将奈何哉。子墨子曰、視二人之国一若レ視二其国一、視二人之家一若レ視二其家一、視二人之身一若レ視二其身一。是故諸侯相愛則不二野戰一、家主相愛則不二相奪一。人與レ人相愛則不二相賊一、君臣相愛則惠忠、父子相愛則慈孝、兄弟相愛則和調、天下之人皆相愛強不レ執レ弱、衆不レ劫レ寡、富不レ侮レ貧、貴不レ敖レ賤。(墨子、兼愛篇中)

此の文によれば、兼愛とは自己と共に他人を愛して、平和を維持し、父子相愛して慈孝の徳を維持し、兄弟相愛して和調することが知られる。此の文中には決して父を無みし孝を無視する意味はない。一般に人間は利己的傾向が強く、その甚だしきに至つては父を弑し君を殺する不孝不義の者となる。戰国時代にはかゝる徒が続出して、世は実に不安の状態であつた。故に墨子はこの弊を救済せんが為に、父子・君臣・兄弟・各人の相愛を説いて人類全体の平和を求めたのである。故に更に曰く、

亂何自起。起レ不二相愛一。臣子之不二孝君父一、所謂亂也。子自愛不レ愛レ父、故虧レ父而自利、弟自愛不レ愛レ兄、故虧レ兄而自利。臣自愛不レ愛レ君、故虧レ君而自利、此所謂亂也。(墨子、兼愛篇上)

と。国家社会の乱れるは、実に人々相愛せざる所に生ずるものであり、不孝不義は実にその表現であるとしている。故に墨子は父を無みする為に兼愛を説いたのではなく、寧ろ親を愛するが故に兼愛を説いたとも見ることができるのである。次の文は克くこの点を明かに示している。

我先従事乎愛利人之親、然後人報我、以愛利吾親乎。意我先従事乎惡賊人之親、然後報我、以愛利吾親乎。即必吾先従事乎愛利人之親、然後人報我、以愛利吾親也。（墨子、兼愛篇下）

此の文に依れば、墨子の兼愛は純粋な沒我的愛ではなくして、自利的愛他である。故に決して自己の親を捨て、他人の親を愛するのではなく、却つて自己の親が他人より愛せらるゝことを欲するが為に他人の親を愛することゝなる。即ち他人を愛する動機は実に自己の親を愛する所に発するのである。かく見れば兼愛説は無父とは反対に、実に親を尊重し孝道を振興する説であると云わねばならぬ。併し兼愛説を道徳的に批判するならば、かゝる動機に発する愛は、報酬報恩を予想した愛であるが故に、そこに難点が存し、功利的利益主義に陥るものとなる。之を逆説するならば他人よりの愛利が無ければ他人を愛利することは無益である、と云う結論となる。かゝる自利的観念から生じた兼愛説であるならば、自己の親を捨て、他人の親を愛するが如き矛盾は万あるべきではない。此の点から考察すれば孟子の攻撃は妥当せざる的外れの感がするのである。然し墨子の末流に至つては、其の学の一部分のみを承け、或はその形迹にのみ拘泥して真意を失い、遂に愛他の極端に馳せ、其の所説が或は世に害毒を流すに至つたのである。之に対して孟子が攻撃したのも已むを得ない所である。果して孟子の攻撃が単に墨家末流の弊を救済せんとする為のものであるならば、許すべき点も存するが、若し兼愛説を全面的に攻撃するに於ては、自己の勢力を拡張する為の手段として非難攻撃したものであると評せられても亦已むを得ないのである。それだからと云つて兼愛説が完全なものであるとも云われない。墨子が乱を悪み平和を維持せんが為に兼愛を説いたのは、誠に多とすべきではあるが、之が利己的思想に基づく点は倫理学的に見て非難を免れない所であつて、表面キリスト教の平等愛の如く見えて、その内容はキリスト教の純粋愛と同一視されるべきものではない。

二　節葬説に對する排撃の批判。孟子が排撃の対象とした墨子の節葬説とは何であるか。墨子は特に葬喪を簡略にすべきことを力説して節葬篇を著し、その一文に曰く

古聖王制為葬埋之法曰、桐棺三寸、足以朽體、衣衾三領、足以覆惡、以及其葬也、下毋及泉、上毋通臭、壠若参耕之畝、則止矣。死則既以葬矣。生者必無久喪。而疾而從事、人為其所能、以交相利也。此聖人之法也。（墨子、節葬篇下）

と。墨子はかく記して節葬を聖王の法であるとし、之を理想として節葬説を主張したのである。これに対して儒家は元来厚葬久喪を理想として其の実践を主張した。其の為孟子は墨子の節葬説を非難した事前述の如くである。

節葬の内容は一聯のものではあるが、葬儀と服喪の二点より考察すべきものである。先づ葬儀について墨子は薄葬を説き、槨を除い

て三寸の棺のみとし衣衾は三領として、最低限度を理想とするのである。孟子は之に対して子の親に対する情を説き、厚葬を主張し、自らも母の死に対して厚葬を行つて、非難を受ける程であつたことは孟子の書に明かである。又節葬説を奉ずる墨者夷之が自己の主義に反して厚葬を行つたことも子として親に対す自然の情であることを暗示し、同時にその矛盾を嘲笑した事は前述の如くであるが、之も亦孟子が薄葬に加えた非難攻撃とも云うべきものである。厚葬が如何に親に対する真情であるとは云え、其の為に産を傾け一生困難に陥るが如きは改むべきことである。況んや唯慣習的、形式的にのみ流れた厚葬に於ておやである。此の点を墨子が認めて非難したのも一理あることであつて、孟子の排撃は必ずしも当を得たものであるとも云われない。

次に久喪については、其の弊害も多かつたものと見え、既に孔子の時代に三年喪が問題となり、論語陽貨篇には弟子の宰我が之を孔子に質問した記事がある。孟子の時代にも三年喪が問題となり、短喪説が斉宣王から提出せられ、公孫丑が之に対え、孟子がこの感想を述べた記事がある。(孟子、公孫丑上)又滕文公が父定公の死に対して、親族近臣が皆短喪説を主張したにも拘わらず、孟子の指導を受けて三年喪を実行した事は有名な話である。その際近親百官は「吾宗国魯先君、莫二之行一、吾先君亦莫二之行一也。至二子之身一而反レ之不可。」(孟子、滕文公上)と述べて反対した。この文によれば、魯に於ても滕に於ても、既に短喪が行われていたと見ることができる。墨子は厚葬久喪の弊を指摘して

今唯無以二厚葬久喪一為レ政、国家必貧、人民必寡、刑政必乱、若法二若言一行二若道一、使二為レ上者行レ此、則不レ能レ聴レ治。使二為レ下者行レ此、則不レ能レ従レ事、衣食之財必不レ足……(墨子、節葬下篇)

と述べている。此の文は久喪の弊の一端を述べたものであるが、三年喪は実際生活に於ては、多くの弊害のあつたことは想像せられる。かゝる弊害の多い久喪説を固守して之を強要するばかりでなく、短喪説を攻撃するにおいては、必ずしも当を得たものであるとは認められない。殊に戦国の時代、軍国多事の際、かゝる久喪説を主張することは時代を解せざるものであつて、孟子の説が迂遠なりとして、採用せられなかつたのも、こゝに一の原因が存するのではあるまいか。

要するに孟子が墨子の節葬説に対する排撃に於て、薄葬に対する非難は、人情の自然よりして厚葬を主張する点のみ当を得たものであると考えられるが、短喪説に対する非難は、当時の社会に即せざる固陋なる意見と見るべきものである。(終)

Summary

Heretical theory of Confucianism.

——Especially concernning that Mencius excluded thought of "Mo-chia" (墨家)——

By Mototaro, ICHIkAWA ※

I. Marks that Mencius excluded "Mo-chia".

"Chien-ai-shuo" (兼愛說) and "Chiek-tsaug-shuo" (節葬說) were two marks that he excluded.

II. Reasen that Meneius excluded "Mo-chia".

1. Therefore, in lore of "Mo-chia". there was opposite theory against Confucianism.
2. Therefore, in lore of "Mo-chia" there was theory that looked like Confucianism but not agreed it.
3. Therefore, lore of "Mo-chia" prevailed in those days so that interrupted to develope Confucianism.
4. Therefore, lore of "Mo-chia" had influence over the region where Mencius convassed so that it was difficult to do it.

III. Criticism to that Mencius excluded "Mo-chia".

※ Professor of Japanese classics, Faculty of Education, at the Shinshu University.